

空き寺を活用 交流拠点に

豊田の営農組合が整備

農家と都市部の消費者つなぐ

豊田市の過疎地に、江戸時代後期に建てられた寺がある。住職が不在で、4年ほど人が住んでいなかった。「空き寺で都市部の住民と地元の人たちの交流を進めたい」と、米作りをする地元の営農組合が4月からこの寺を借り、交流拠点にした。新型コロナウイルスの感染拡大が収まれば、様々なイベントが開かれる予定だ。

「新修豊田市史」によると、同市押井町の普賢院は白鳳時代（7世紀後半）〜8世紀初頭）の創建と伝わる。戦国時代に武田氏に攻

められて廃寺になったが、江戸時代前期の寛永年間に再興。今の本堂は1814年に、庫裏（住居）は1822年に建てられた。

今回の、寺を借りた地元の押井営農組合によると、住職はすでに亡くなり、住職の妻も高齢で転居し、4年ほど前から空き寺になっていた。

組合は7・6畝の農地を使い、集落に住む約30世帯分の米「ミネアサヒ」を、多い時には年間で2400キログラムほど自給していた。だが、高齢化で耕作していない農地も増えてきた。「このままでは田畑が荒れてしまふ」と危機感を持ち、今季から遊休農地を使い、集落以外の希望者の分も契約栽培することにした。これまでに豊田市中心部の30世帯と契約できたという。

本尊などの仏像は組合が管理する。古い道具類や家具を片付け、オークションにかけるイベントを2月24日に開催。地元の人たちや米の契約者ら約70人が参加し、さっそく都会と田舎の交流が始まった。

今回は、寺を借りた地元の押井営農組合によると、住職はすでに亡くなり、住職の妻も高齢で転居し、4年ほど前から空き寺になっていた。

組合は7・6畝の農地を使い、集落に住む約30世帯分の米「ミネアサヒ」を、多い時には年間で2400キログラムほど自給していた。だが、高齢化で耕作していない農地も増えてきた。「このままでは田畑が荒れてしまふ」と危機感を持ち、今季から遊休農地を使い、集落以外の希望者の分も契約栽培することにした。これまでに豊田市中心部の30世帯と契約できたという。



都市住民と地元の人たちの交流拠点として使われる普賢院。4年近く空き寺だった＝いずれも豊田市押井町



普賢院の片付けで出てきた古い道具類などをオークションにかけた。2月24日、鈴木辰吉さん提供

組合代表理事の鈴木辰吉さん（67）は市の「おいでん・さんそんセンター」のセンター長も務め、豊田市の中山間地への移住希望者の相談にもなっている。「せっかくなら、米を契約して